

了次

いかに膝をまじへて時の移るのを知るなり程  
 快談するとは殆どまい。もしある場合には  
 その相手が餘程の詠術家で、僕に口をあかせ  
 るい程に立てつづけに喋つてくれる人であ  
 るねばよろしい。  
 私に親しい友達の出来まゝのそのせい、  
 も知らぬまい。死んだ鈴木泉三郎は勝れた詠術  
 家たつた。一交彼と言葉を交へれば、大抵千  
 ヤアムさ始めて逢つた人でもれたらしい。若い文學  
 青年が多く彼のところへ出入したのも、一に  
 はこの詠術の巧みま  
 引力であつたらしい。  
 鈴木の死後、向ひ合つてゐるたけい、喋り  
 たければ喋るし、黙つてゐればいつおひ  
 ら黙つてゐて差支へないやうな、遠慮気兼ね  
 なく物味の出来た友達をおか得おにゐる。  
 顔と見合はは、何か知らず負擔を感じたりや  
 る重苦しい氣持になるのは、矢張り私の口の  
 重いせいだ。詠術の下手なせいで。しかしこ  
 れとよくあうまうとあつたのは、  
 小説を書くのよりも私にはあつかしい。将来

北尾亀男